12/15(土) まいど！倫々会です。12月も中旬いかがお過しですか、巷ではボーナスの話しも干うホうですネ、今週の倫理は苦難を強い方、心のありようで解消できる。とか大らかに受け入れる時 苦難そのものが人生を豊かにするとか…有難い。

今週の倫理 1112号 2018.12.15～12.21

十二月のテーマ 捨てる生活

苦難に向き合う心のありよう

え・城谷俊也

「人間万事塞翁が馬」という格言があるように、人の一生は幸不幸が交錯して織り成されるものです。人生を充実したものにするかどうかの分岐点は、苦難とその受け止め方にあります。

＊

S県で建築会社を営むK氏は、5代目の社長として、22歳で後継者として家業に入りました。

父との確執をはじめ、次々と問題が押し寄せるなか、顧客トラブルで数千万円の負債を抱え、会社は崩壊寸前に追い込まれました。孤立感に苛まれながらも、難病で亡くなった母に誓った「恩に報い、喜ばれる人間になろう」という思いを胸に、必死に働き続けてきました。〈なぜ自分以外の問題で苦しまなければいけないのか〉と反芻しつつ、〈父親を変えたい。社員を教育したい〉と逃げることなく、苦難に立ち向かってきました。

しかし、環境はなかなか好転しません。親戚や社員に頭を下げ、辛うじて資金をつないできましたが、K氏にとって、仕事は辛いものでしかありませんでした。

転機が訪れたのは41歳の時です。倫理法人会との出合いから、「苦しみに立ち向かう」という自分の心のベクトルの方向が違っていたことに気づき始めたのです。

〈これまでは外にばかり心を向け、相手を責めていたが、言えるだけの自分だっただろうか〉

自分を静観すると、〈一番頑張っているのも、一番働いているのも自分だ〉との思いから、周囲を怒鳴りつけ、しかめっ面をして働く姿が目に浮かんできました。しかし、経営が厳しい時に支えてくれたのは家族であり社員でした。

自分がいかに周囲に助けられてきたかを思い、母に誓った「喜ばれる人間になる」ことをもう一度胸に刻んだK氏。そして、苦難に立ち向かうのではなく、ありのままに受け止め、爽やかに対応していこうと決心したのです。

それからというもの、K氏は経営理念を策定し、活力朝礼を導入して、自社のミッションや情熱を社員に語るようになりました。起きることすべては自分の問題だと捉えるようになると、怒る機会も格段に減りました。また、明朗、率先垂範の実践を心がけているうちに、社員にも積極性が現われてきたのです。その結果、新規顧客が増え、数年で債務超過が解消し、黒字に転じたのでした。

氏は、「倫理を学んでいなければ、苦難の連鎖から脱却できなかったかもしれない」と振り返ります。

「まず自分から変わること、苦難をそのままに受け入れること」を根幹に据え、社員と喜びを分かち合いながら仕事に励んでいます。

苦痛は、なかなか喜べるものではない。それは、自分本位であり、己にとらわれているからである。苦痛のただ中にとざされた時は、その中から抜け出して、外から自分の姿を心を、静かに眺めてみるがよい。

（丸山敏雄著『人類の朝光』より）

苦難や人と対峙してしまう自己本位の心から離れて、起きてくることを大らかに受け入れる時、苦難そのものが人生を豊かにする、かけがえのない宝となるのです。